

3. 定点把握対象感染症患者報告状況（週報）

（１）過去５年間の報告状況

疾患名	平成 24 年	平成 25 年	平成 26 年	平成 27 年	平成 28 年
インフルエンザ	11,784	8,409	9,668	8,574	9,808
RS ウイルス感染症	1,302	1,861	1,838	1,679	1,976
咽頭結膜熱	490	285	582	453	448
A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	1,807	1,121	894	1,418	1,347
感染性胃腸炎	9,263	8,820	7,894	7,411	9,708
水痘	1,765	1,101	889	544	300
手足口病	151	1,574	184	4,191	332
伝染性紅斑	448	19	47	197	343
突発性発しん	1,037	959	934	862	798
百日咳	19	10	25	17	30
ヘルパンギーナ	648	1,056	911	428	876
流行性耳下腺炎	720	193	51	179	1,399
急性出血性結膜炎	1	1	—	—	1
流行性角結膜炎	21	22	15	23	30
細菌性髄膜炎	2	3	1	3	2
無菌性髄膜炎	9	9	1	3	3
マイコプラズマ肺炎	55	17	26	43	57
クラミジア肺炎	—	3	—	—	1
感染性胃腸炎(ロタウイルス) ¹⁾		1	32	40	58

¹⁾ 平成 25 年 10 月 14 日より定点把握対象感染症に指定された。

(2) 各疾病の報告状況

① インフルエンザ（鳥インフルエンザ及び新型インフルエンザ等感染症を除く）

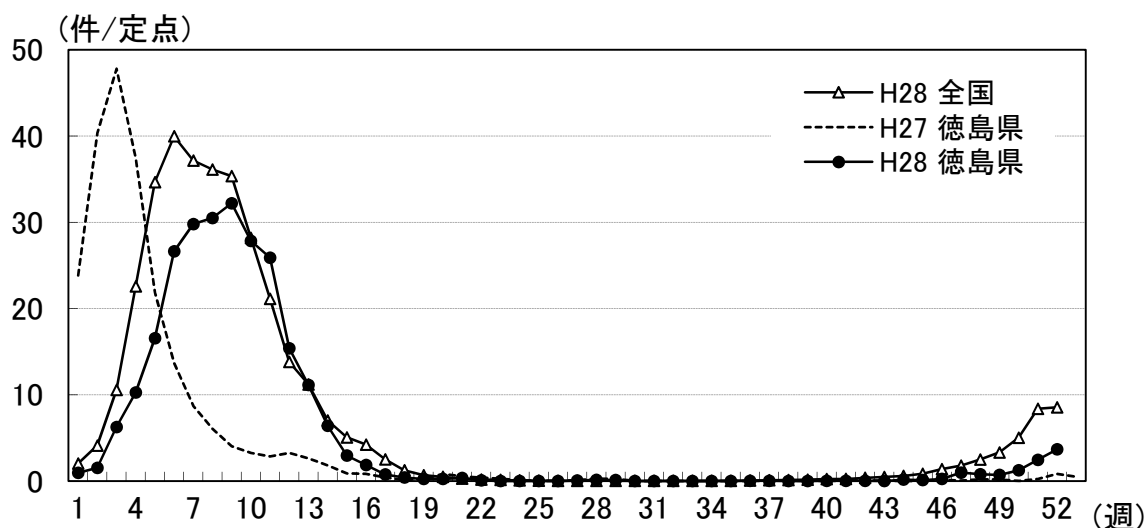
年間報告数は9,808件であり、前年（8,574件）よりやや増加した。

本年の前期流行は、前シーズンより約1ヵ月遅い第2週に流行期入りした後、7週連続で急増しピーク（32.2件／定点）を迎えた。ピークの高さは前年（47.8件／定点）と比べ低かったものの、報告数が注意報レベル（10件／定点）を超えた期間（第4～13週）は、前年（第52～6週）と比べ長かった。

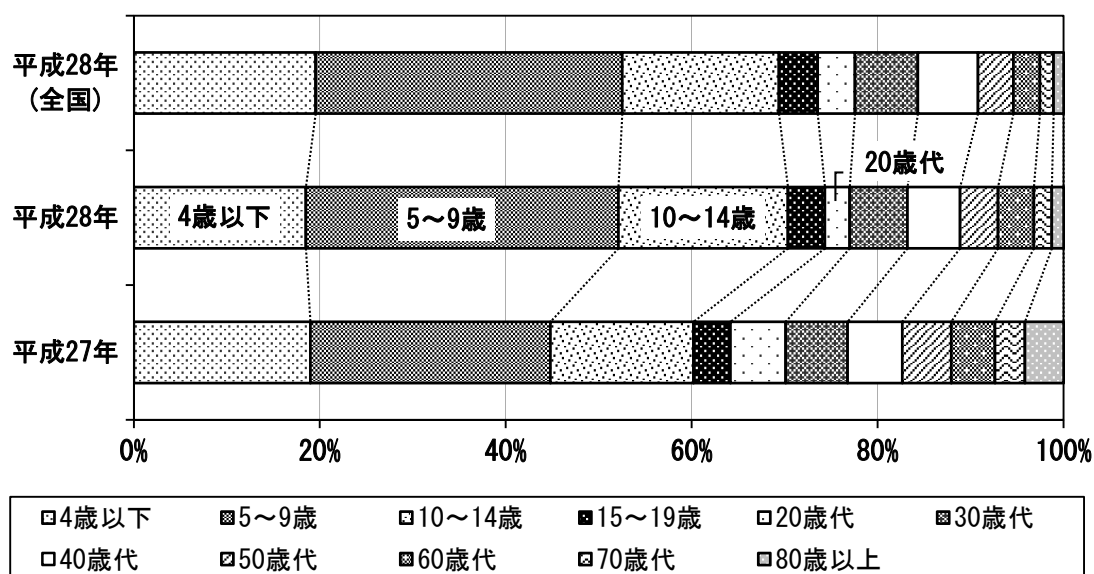
後期流行については、例年とほぼ同じ第50週に流行開始の目安とされる1.0件／定点を超え、流行シーズンを迎えた。

年齢層別報告数では、4歳以下18.5%、5～9歳33.6%、10～14歳18.2%、15～19歳4.0%、20歳以上25.7%であり、前年と比較して5～9歳の割合が高く、20歳以上の割合が低かった。

インフルエンザの週別患者報告状況



インフルエンザの年齢層別報告数



② RS ウイルス感染症

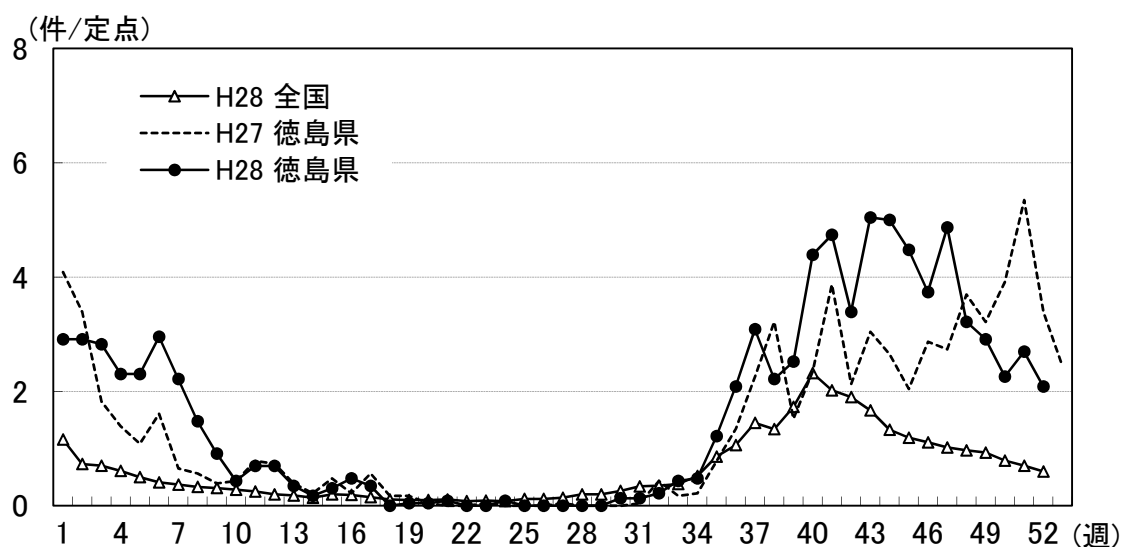
年間報告数は1,976件であり、前年（1,679件）よりやや増加した。

前期流行は、前年の後期流行を継続したまま、第9週まで報告数の高い状態が続いた。

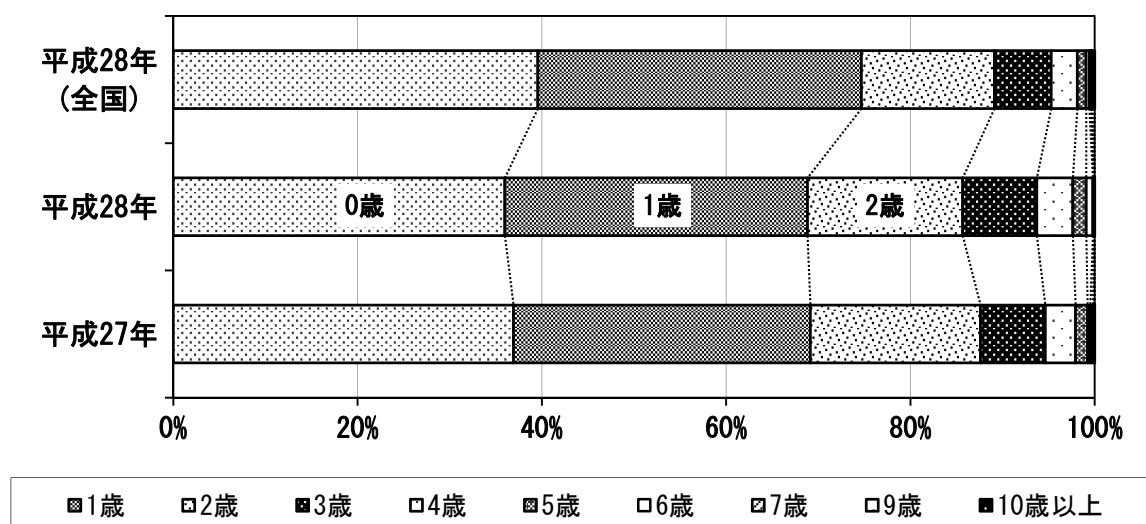
後期流行は、前シーズン同様に例年より約2ヶ月早い8月下旬より報告数が増加し始め、第40週から第47週までの長い期間、報告数の高い状態が続いた。はっきりしたピーク（第43週：5.0件／定点）は見られなかったが、流行期間が長く、全国平均を上回る報告数のまま越年した。

年齢層別報告数では、0歳36.0%、1歳32.8%、2歳16.9%、3歳8.0%、4歳以上6.3%であり、前年と同様に2歳以下の乳幼児の割合が大半（約86%）を占めた。

RS ウイルス感染症の週別患者報告状況



RS ウイルス感染症の年齢層別報告数



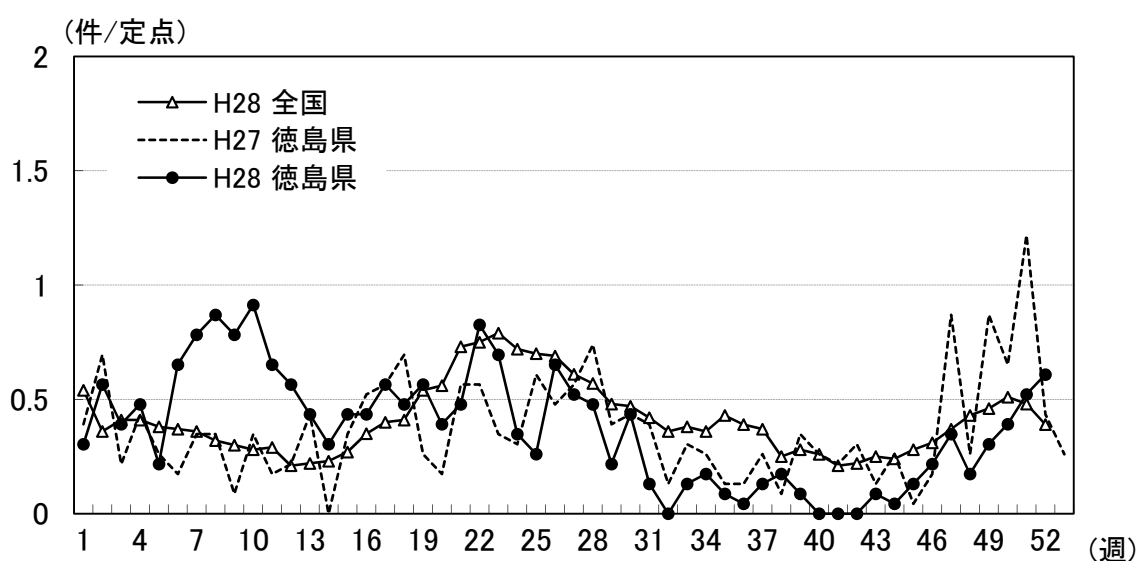
③ 咽頭結膜熱

年間報告数は448件であり、前年（453件）とほぼ同数報告された。

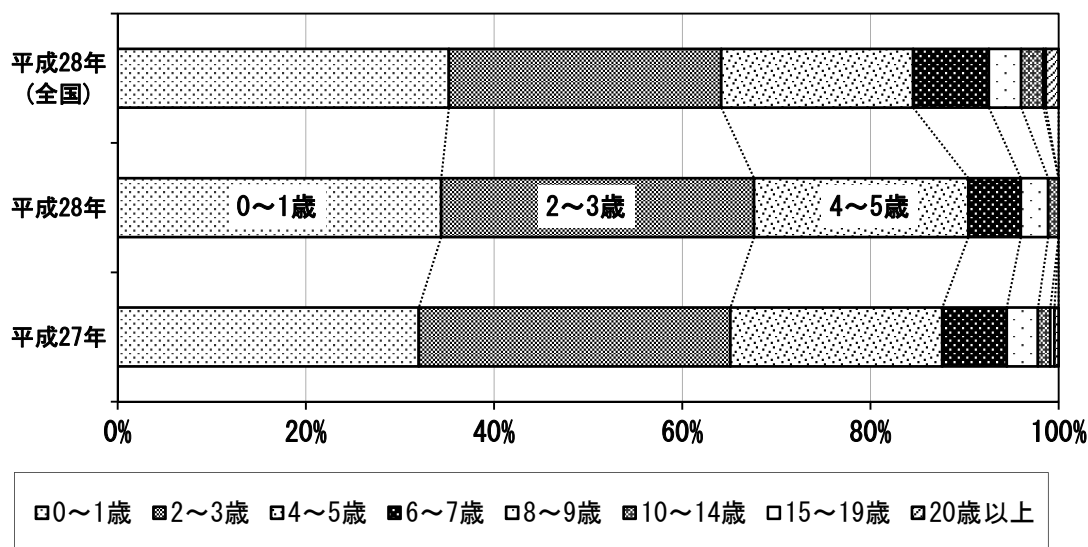
本疾患の流行パターンは、4月ごろから増加し始め7～8月にピークを示し、秋にも小規模な流行が見られる年もあるとされる。本年は例年と異なり、3月上旬に県内一部の地域での地域流行や、5～7月頃にやや増加した時期はあったものの、夏から秋にかけてはほとんど報告されず、晩秋である第45週より増加傾向を示したまま越年した。

本疾患は一般的に4歳以下の乳幼児からの報告が多く、本年の年齢層別報告数も、1歳以下34.4%、2～3歳33.3%、4～5歳22.8%、6～7歳5.6%、8歳以上3.9%であり、5歳以下が約91%を占めた。

咽頭結膜熱の週別患者報告状況



咽頭結膜熱の年齢層別報告数



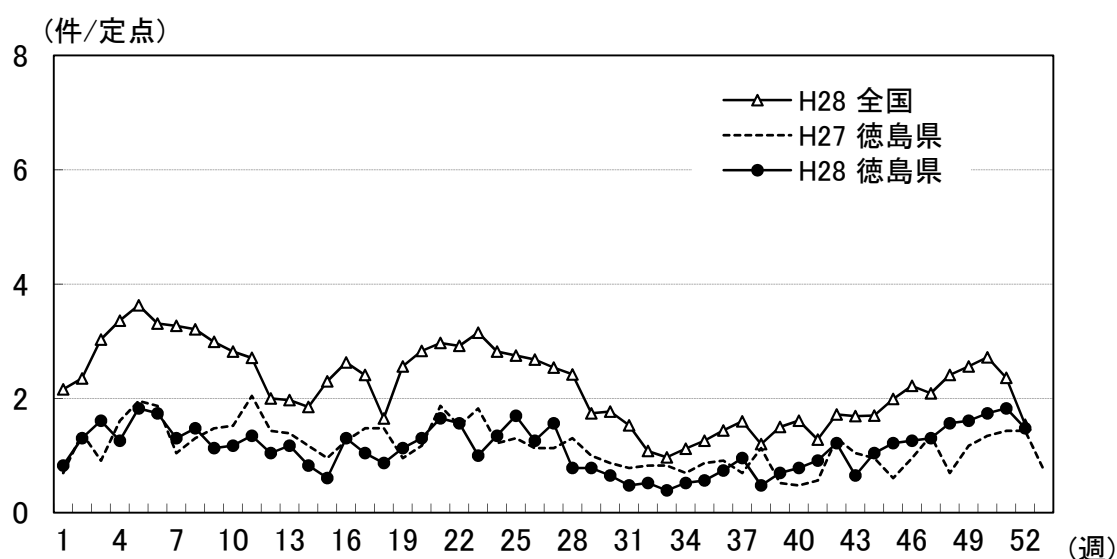
④ A 群溶血性レンサ球菌咽頭炎

年間報告数は1,347件であり、前年（1,418件）とほぼ同数報告された。

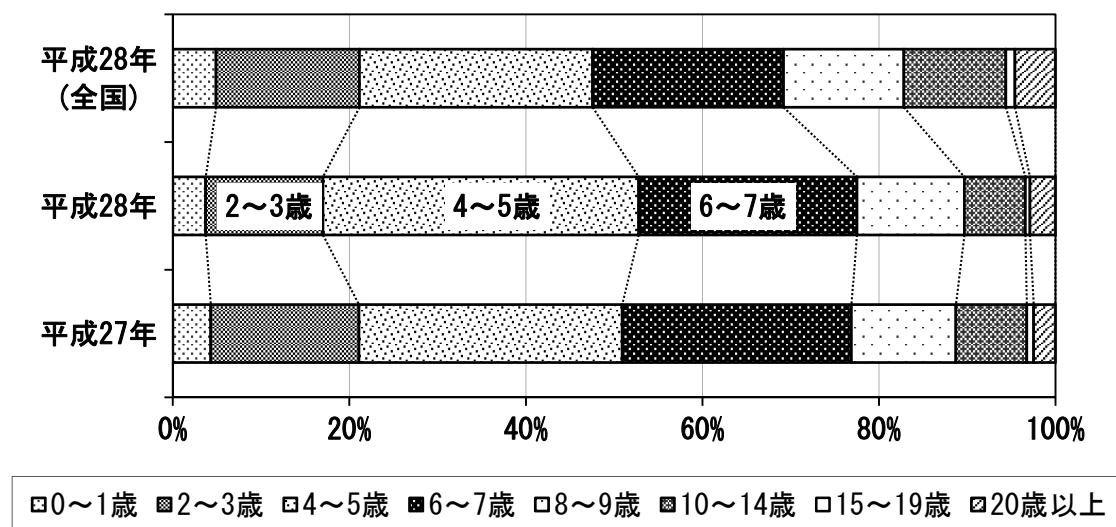
本疾患は、冬季および春から初夏にかけて報告数が増加するとされる。本年は、年当初から初夏にあたる第28週頃までやや高く推移したものの、年間を通して報告数に大きな増減は見られず、2年続けて同様の流行パターンを示した。

本疾患はいずれの年齢層からも報告されるが、学童期小児からの報告が多いとされる。本年の年齢層別の報告数も、0～1歳3.7%、2～3歳13.3%、4～5歳35.8%、6～7歳24.7%、8～9歳12.2%、10～14歳6.9%、15歳以上3.4%と、学童期小児の割合が高かった。

A 群溶血性レンサ球菌咽頭炎の週別患者報告状況



A 群溶血性レンサ球菌咽頭炎の年齢層別報告数



⑤ 感染性胃腸炎

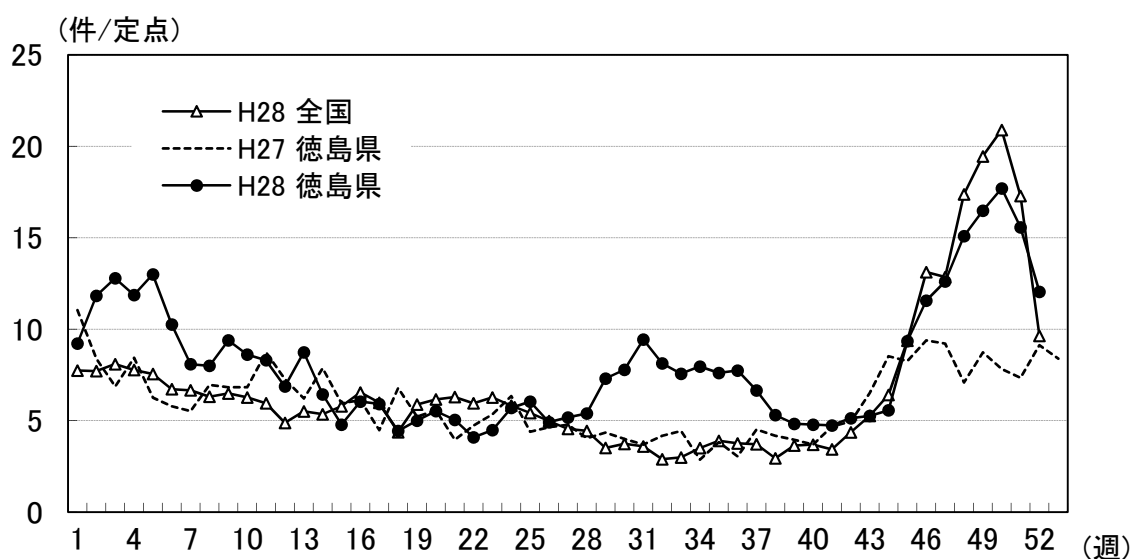
年間報告数は9,708件であり、前年(7,411件)から大きく増加(約30%)した。

本疾患の流行パターンは、初冬から増加し始め、12～1月頃に一度ピークが見られた後、春にもう一つなだらかなピークを示すことが多い。本年の前期流行も、前年の10月頃(第40週)より報告数が増加し始め、第46週にシーズン最初のピーク(9.2件/定点)を示した。そして第2週より再び増加傾向となり第5週に2回目のピーク(13.0件/定点)をつけた後、緩やかに減少した。

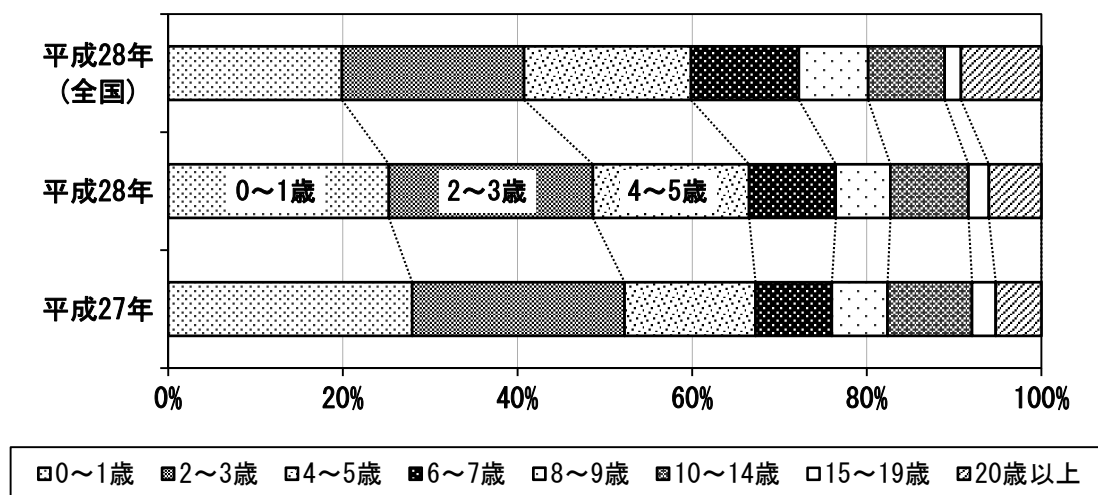
後期流行は11月初旬(第45週)から報告数が急増し、第50週にピーク(17.7件/定点)が見られた後、高い状態のまま越年した。

年齢層別報告数は、0～1歳25.3%、2～3歳23.4%、4～5歳17.9%、6～7歳9.9%、8～9歳6.3%、10～14歳8.9%、15歳以上8.3%と5歳以下の乳幼児が全体の約67%を占めた。

感染性胃腸炎の週別患者報告状況



感染性胃腸炎の年齢層別報告数



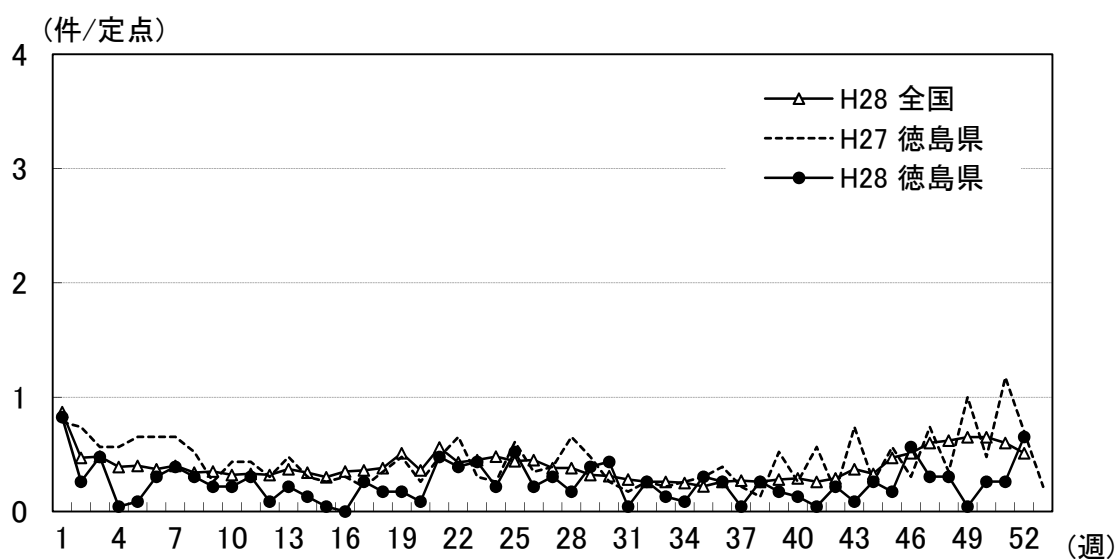
⑥ 水痘

年間報告数は 300 件と、平成 25 年以降は 4 年続けて減少し、過去 5 年間で最も多かった平成 24 年（1,765 件）に比べ約 1/6 の報告数となった。

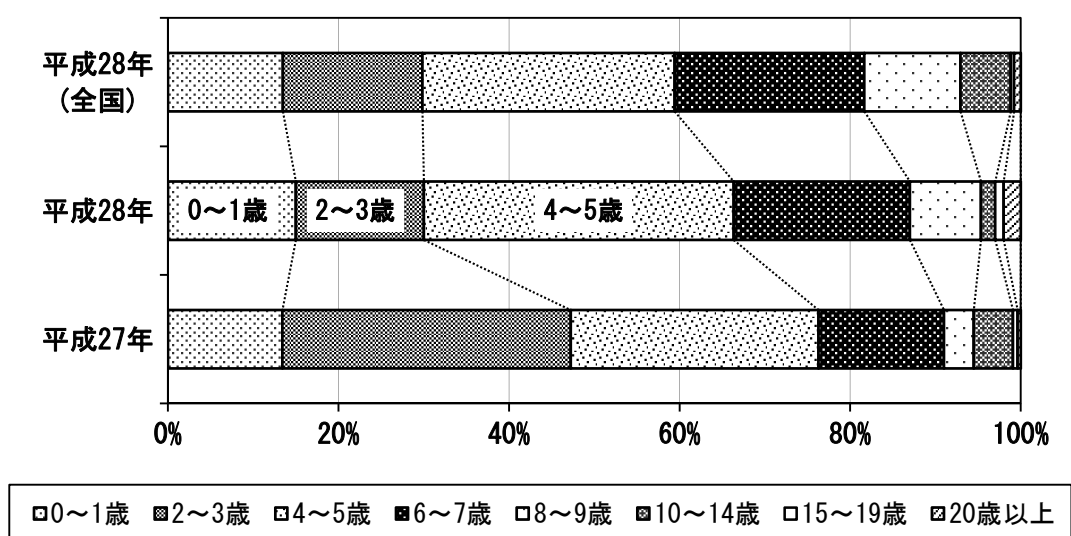
本疾患は年間を通して発生するが、主に冬から春にかけて流行し、夏から初秋は減少するとされる。本年も年間を通して報告され、5 月下旬に県内一部の地域において地域流行などみられたものの大きなピークは見られず、年間を通じて低い報告数（1.0 件／定点以下）のまま推移した。

年齢層別報告数では、0～1 歳 15.0%、2～3 歳 15.0%、4～5 歳 36.3%、6～7 歳 20.7%、8 歳以上 13.0%と 5 歳以下の報告が全体の約 66%を占めた。

水痘の週別患者報告状況



水痘の年齢層別報告数



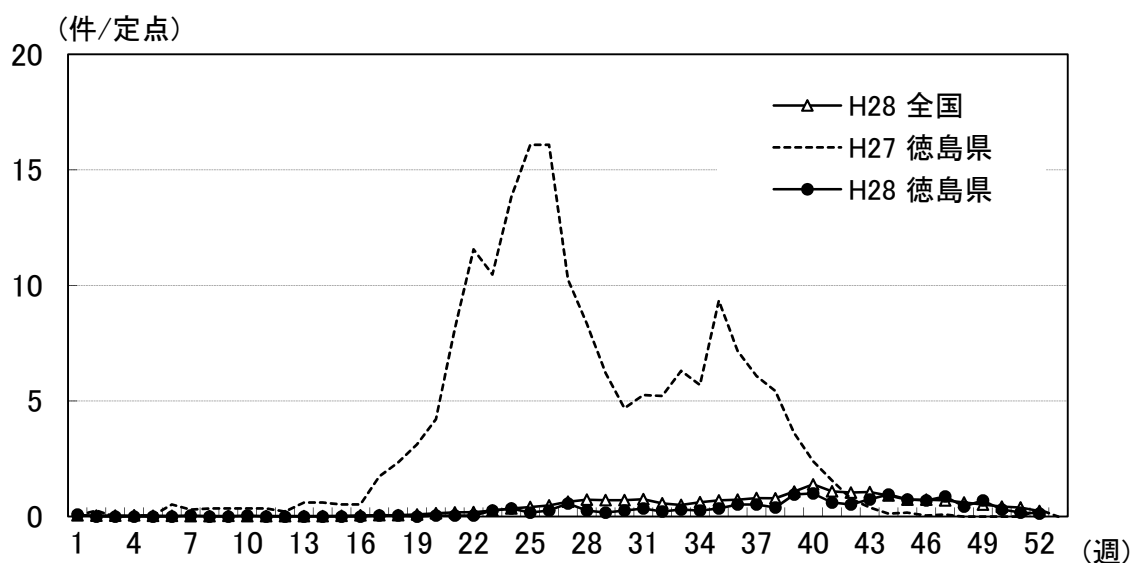
⑦ 手足口病

年間報告数は 332 件と、大きな流行が見られた前年（4,191 件）と比べ 1 割以下に減少した。過去 5 年間では、平成 25 年（1,574 件）、27 年と 1 年おきに流行が見られている。

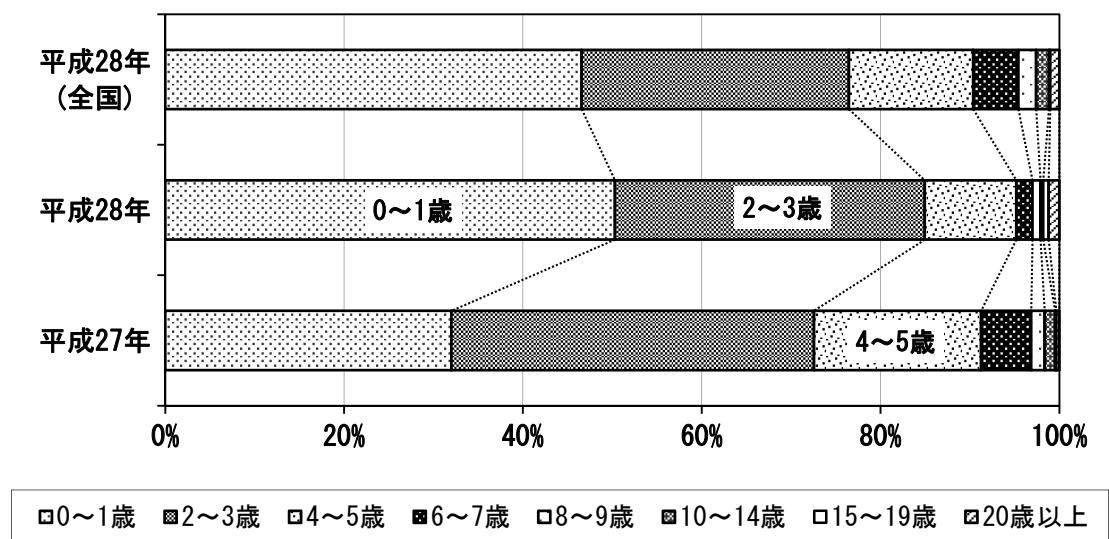
本疾患は夏に流行する代表的な感染症であり、例年 7～8 月にピークを迎える。本年は、流行年であった前年と異なり、夏季を中心に報告は見られたものの、年間を通して低い報告数（1.0 件／定点以下）で推移し、ピークも見られなかった。

年齢層別報告数において、例年、5 歳以下の乳幼児からの報告が 9 割を占めているが、本年も、0～1 歳 50.3%、2～3 歳 34.6%、4～5 歳 10.2%、6～7 歳 1.8%、8 歳以上 3.1%であり、5 歳以下からの報告が全体の約 95%を占めていた。

手足口病の週別患者報告状況



手足口病の年齢層別報告数



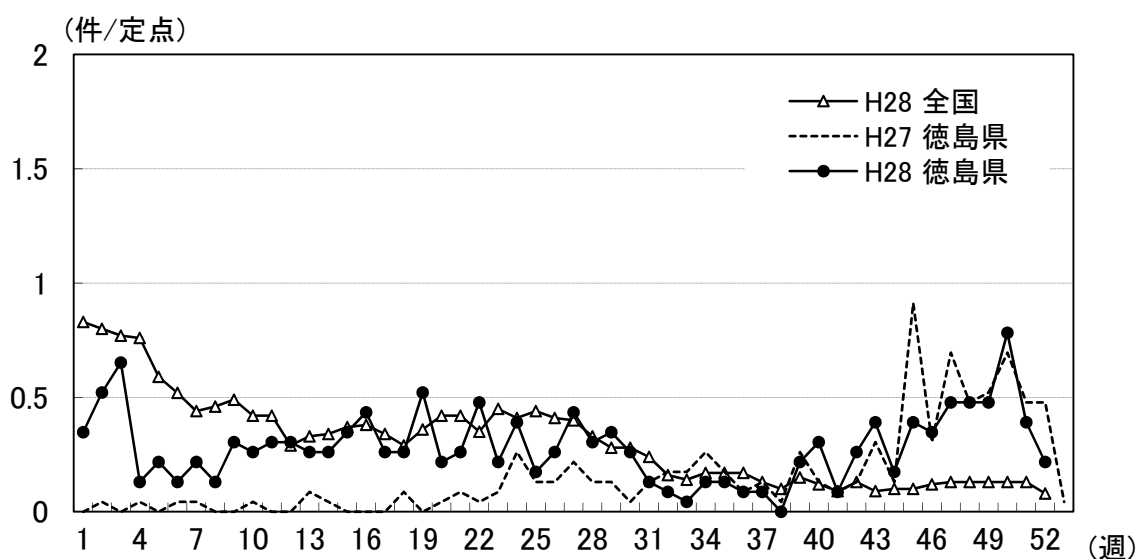
⑧ 伝染性紅斑

年間報告数は343件と、前年（197件）の約1.5倍に増加した。過去5年間の報告数の推移では、19～448件と年毎により報告数の変化が大きい。

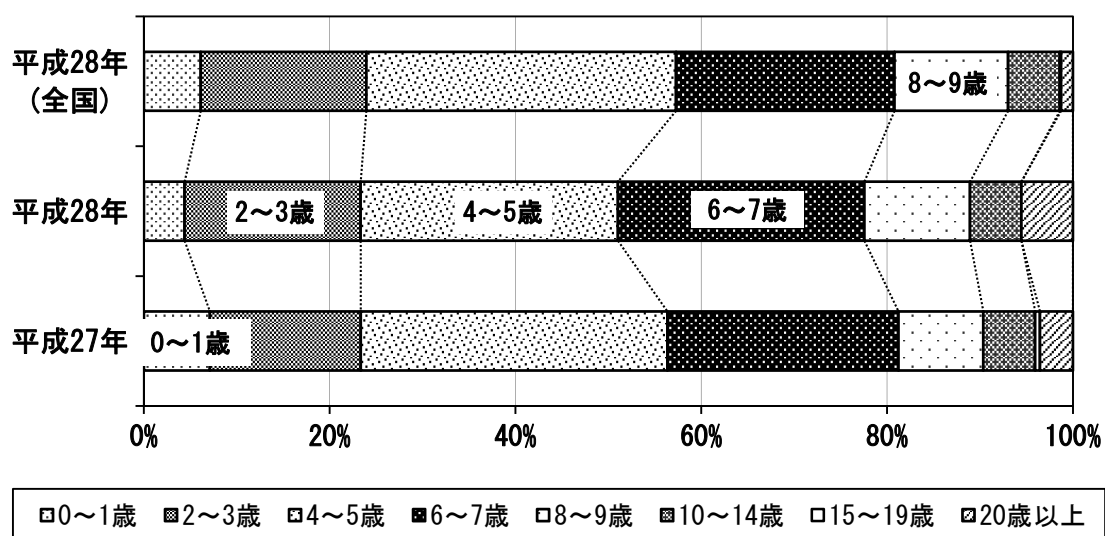
本年は年間を通し、多少の増減を繰り返しながら0.78件／定点以下の低値で推移した。ピークや季節的な変動も示さず、前年認められた地域流行も見られなかった。

年齢層別報告数では、0～1歳4.4%、2～3歳19.0%、4～5歳27.7%、6～7歳26.5%、8～9歳11.4%、10歳以上11.0%と、4～7歳の幼少児での割合が高かった。

伝染性紅斑の週別患者報告状況



伝染性紅斑の年齢層別報告数



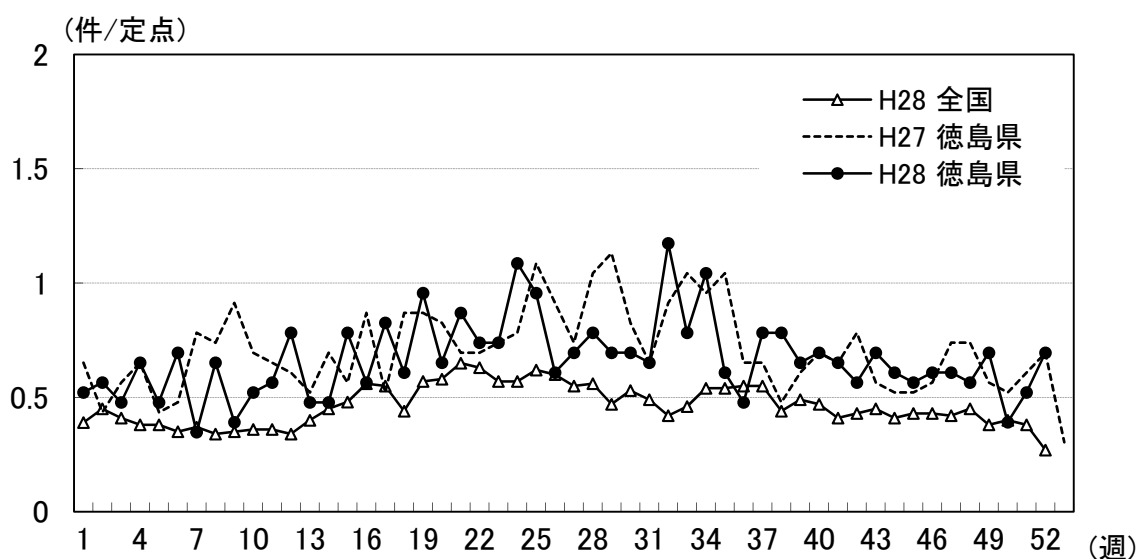
⑨ 突発性発しん

年間報告数は798件であり、前年(862件)からやや減少した。過去5年間の報告数をみても平成24年(1,037件)から毎年少しずつ減少している。

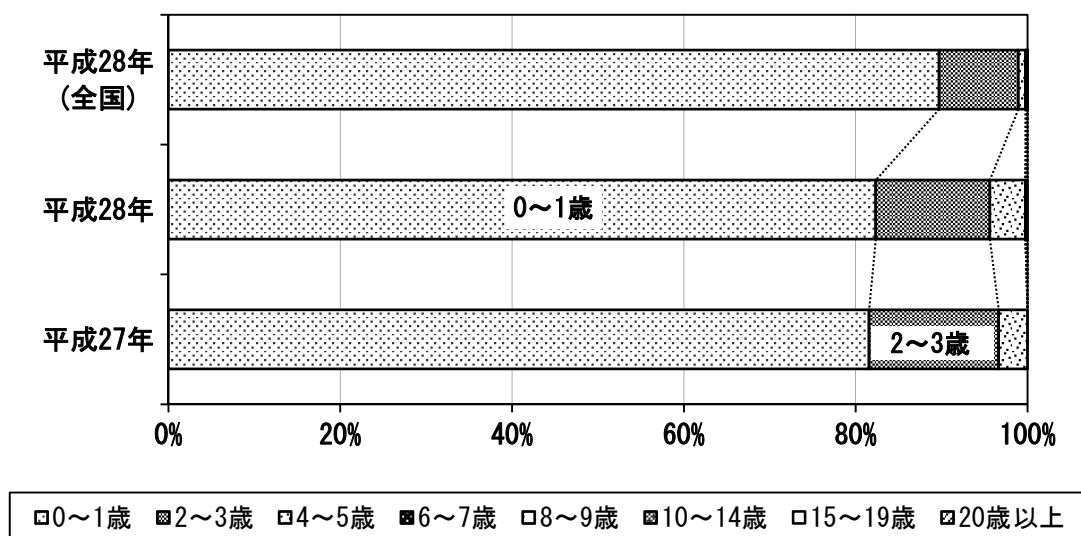
一般に本疾患は、季節性も年次推移も認められず、年間を通じてほぼ一定の範囲内をスパイク状の増減を繰り返しながら推移するとされる。本年もピークは示さず、大きな季節的変動も見られないまま、報告数は一定の範囲内(0.4~1.2件/定点)で推移した。

年齢別では6カ月~1歳代の小児に好発し、ほとんどの子どもが3歳までに感染するといわれている。本年も0~1歳82.3%、2~3歳13.3%、4~5歳4.1%、6歳以上0.3%と、例年同様、1歳以下が最も多く報告され、3歳以下で大半(約96%)を占めた。

突発性発しんの週別患者報告状況



突発性発しんの年齢層別報告数

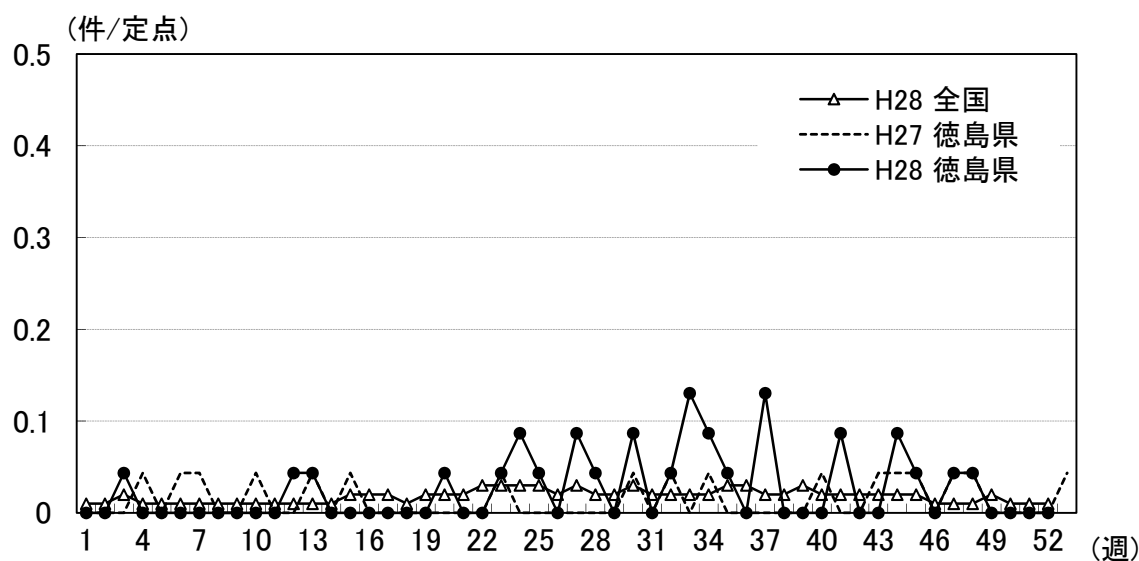


⑩ 百日咳

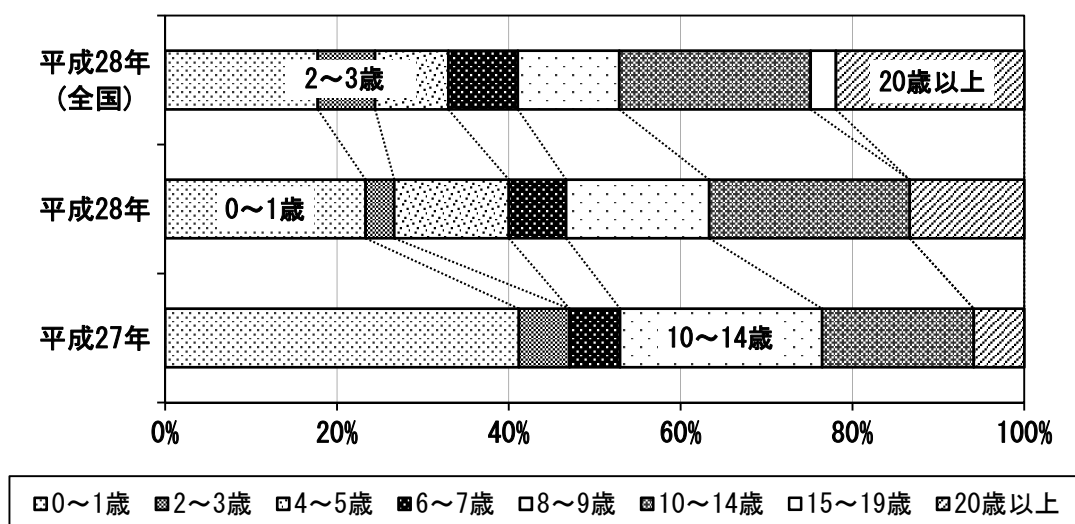
年間報告数は30件であった。過去5年間の報告数は、毎年10～30件で推移している。本年も季節的变化は見られず、報告数は一定の範囲内（0～0.13件／定点）で推移した。

年齢層別報告数では、0～1歳23.3%、2～3歳3.3%、4～5歳13.3%、6～7歳6.7%、8～9歳16.7%、10～14歳23.3%、20歳以上13.4%であった。報告数が少ないため単純に比較することはできないが、前年と比べ10歳以上の割合が増加していた。

百日咳の週別患者報告状況



百日咳の年齢層別報告数



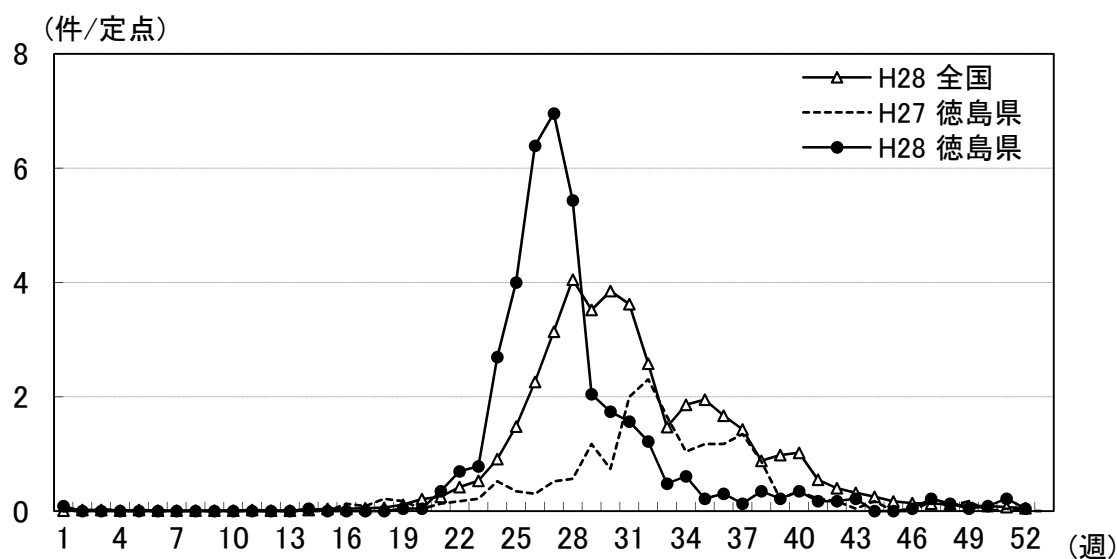
⑪ ヘルパンギーナ

年間報告数は876件と、前年(428件)から大きく増加した。過去5年間においても428～1,056件で推移し、流行の大きかった年と小さかった年では約2倍程度、報告数が増減している。

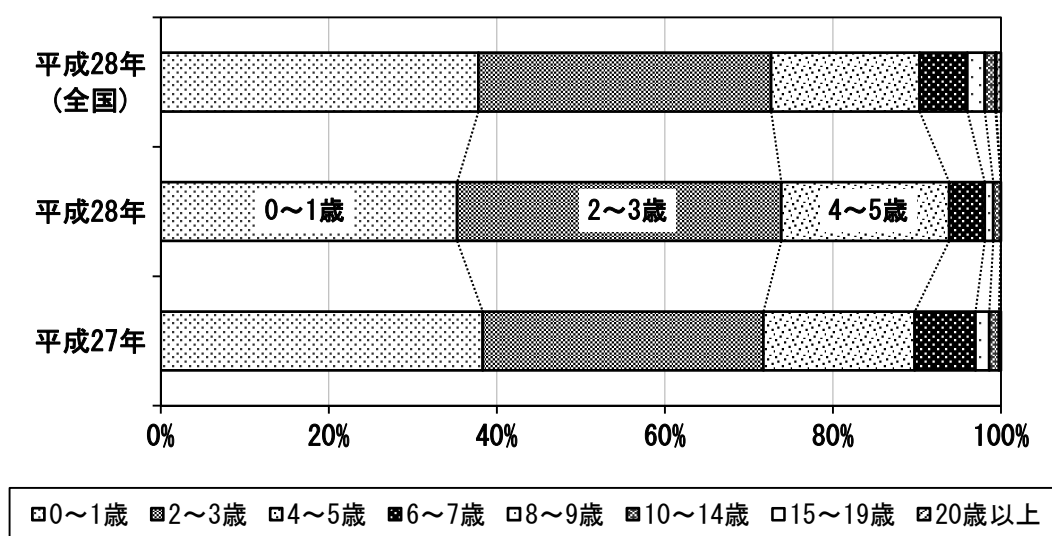
本疾患は、手足口病とともに主に乳幼児の間で流行する夏期の代表的な感染症である。本年は、6月初旬(第22週頃)より報告数が増加し始め、6月中旬(第24週頃)より急増し、第27週にピーク(7.0件/定点)が見られた。大きな流行となった平成25、26年と同様の流行パターンを示した。

年齢層別報告数では、5歳以下が大半(約90%以上)を占め、1歳代がもっとも多いといわれている。本年も、1歳以下35.3%、2～3歳38.6%、4～5歳20.0%、6～7歳4.2%、8歳以上1.9%であり、5歳以下の乳幼児が約94%を占めた。

ヘルパンギーナの週別患者報告状況



ヘルパンギーナの年齢層別報告数



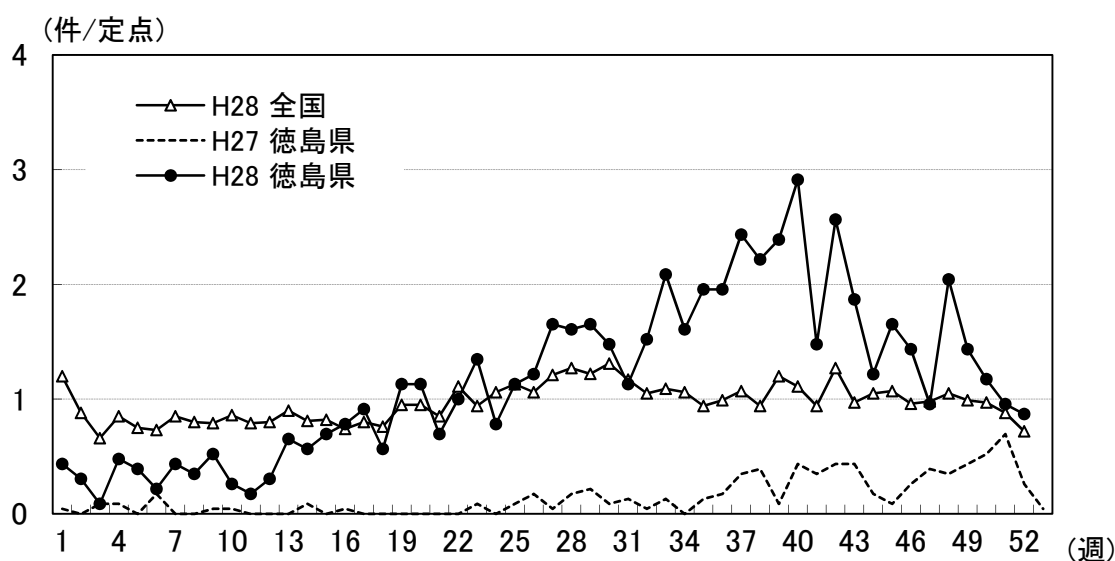
⑫ 流行性耳下腺炎

年間報告数は1,399件と、前年(179件)の約8倍に大きく増加し、6年ぶりの流行年となった。過去10年間では平成17～18年、平成22～23年と、数年おきに2年続けて大きな流行が見られている。

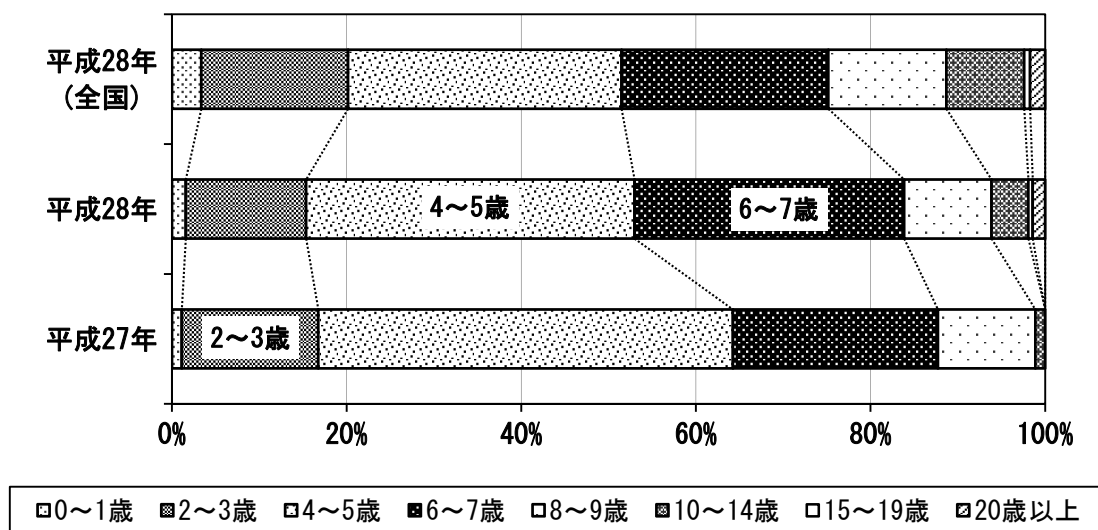
本疾患は年間を通して発生するが、晩冬から春にかけて多くなるとされる。本年は、3月下旬(第3週)より緩やかに増加し始め、増減を繰り返しながら増加傾向は10月まで続き、第40週にピーク(2.9件/定点)示した。

年齢層別報告数では、0歳から4歳まで年齢を重ねるとともに増加し、5歳以降は年齢とともに減少するとされている。本年も、1歳以下1.6%、2～3歳13.8%、4～5歳37.6%、6～7歳30.9%、8～9歳10.0%、10歳以上6.1%であり、4～7歳の小児からの報告数が約7割を占めた。

流行性耳下腺炎の週別患者報告状況



流行性耳下腺炎の年齢層別報告数

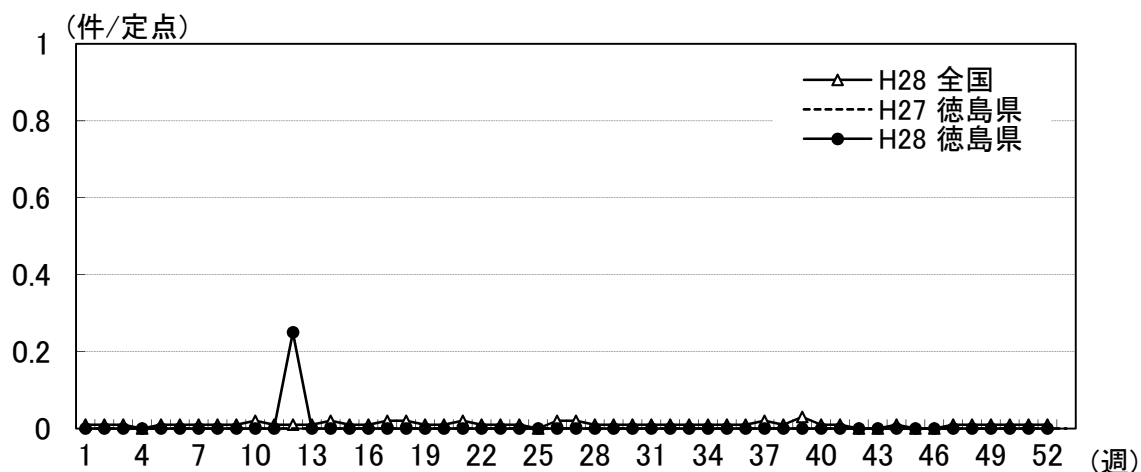


⑬ 急性出血性結膜炎

本疾患は局地的に流行することがあるが、流行のない年は季節性も見られず、報告数は低いまま微増微減を繰り返すとされる。

本年は1件報告された。過去5年間でも毎年0～1件で推移し、徳島県内での流行は見られていない。

急性出血性結膜炎の週別患者報告状況

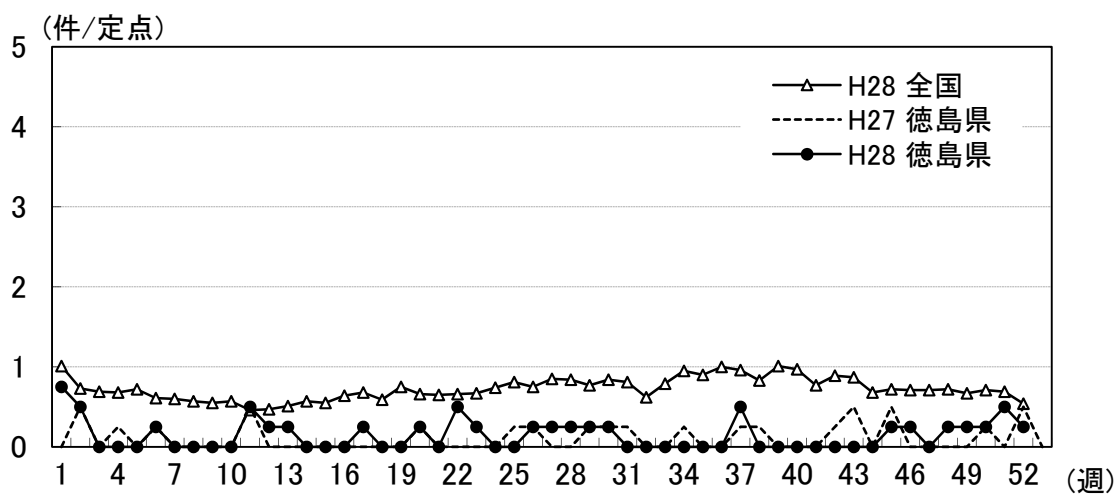


⑭ 流行性角結膜炎

年間報告数は30件と前年(23件)からやや増加したが、年間を通して0.75件/定点以下の低値で推移した。

年齢層別報告数では、10歳未満6.6%、20歳代10.0%、30歳代26.7%、40歳代20.0%、50歳代10.0%、60歳代以上26.7%と幅広い年齢層から報告され、年齢による特徴は見られなかった。

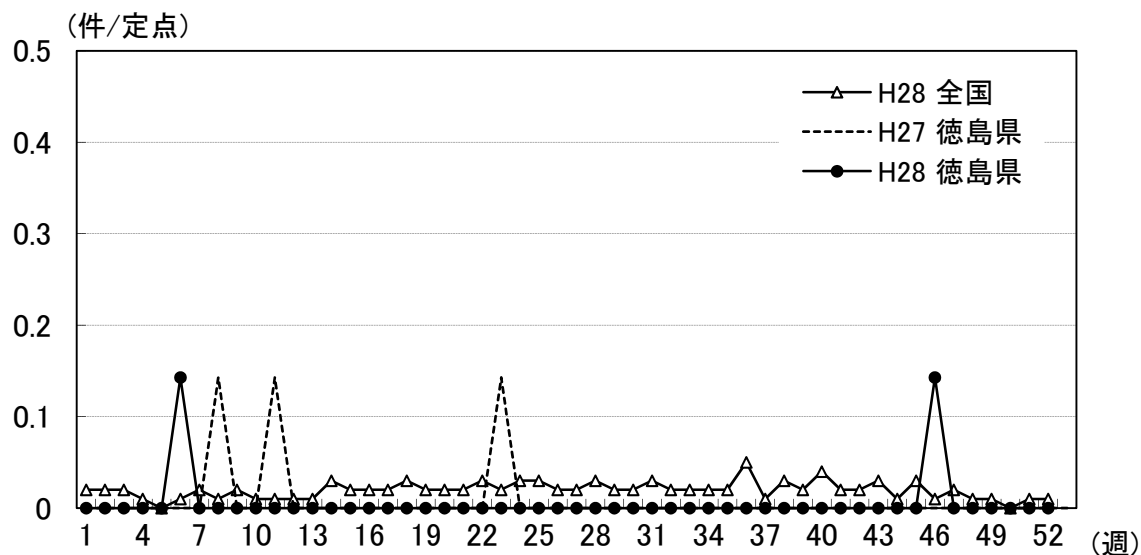
流行性角結膜炎の週別患者報告状況



⑮ 細菌性髄膜炎

年間報告数は2件（5歳未満）であり、2件とも病原体はB群溶血性レンサ球菌が検出されている。過去5年間に於いても、毎年1～3件で推移している。

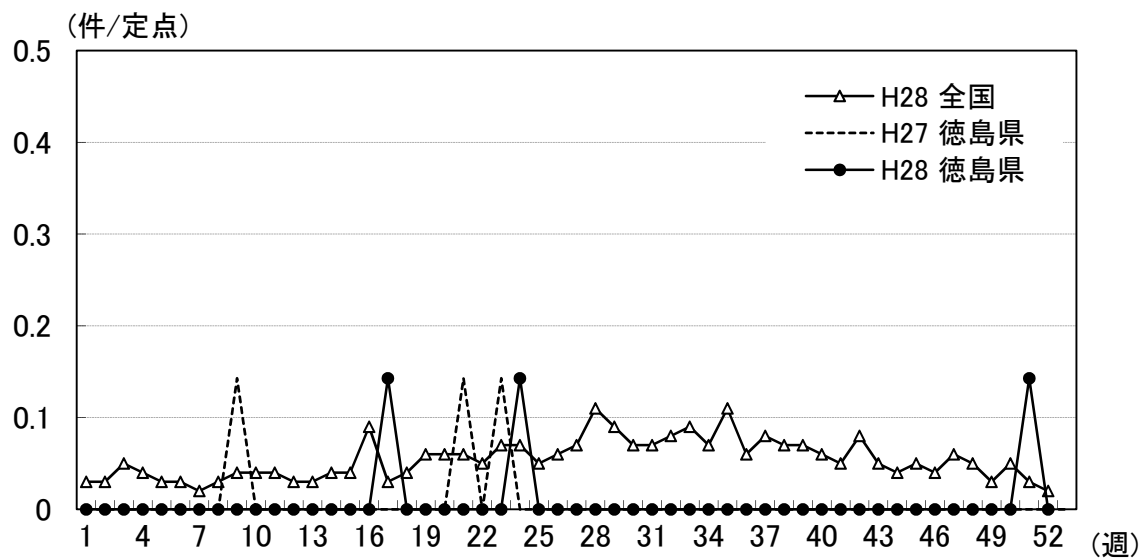
細菌性髄膜炎の週別患者報告状況



⑯ 無菌性髄膜炎

年間報告数は3件（20歳代～40歳代）であり、病原体は検出されていない。過去5年間では、毎年1～9件で推移している。

無菌性髄膜炎の週別患者報告状況



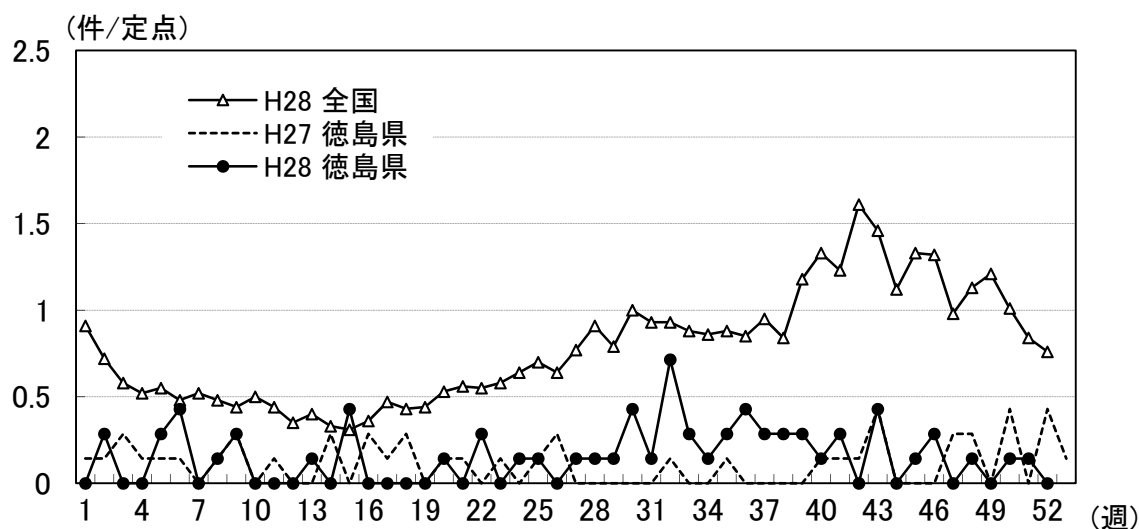
⑰ マイコプラズマ肺炎

年間報告数は57件と、前年(43件)からやや増加した。過去5年間では、年間17～57件で推移している。

本疾患は年間を通して発生するが、秋から冬にかけて多くなるとされる。本年も季節的な特徴は見られず、年間を通して0～0.71件/定点の低値で推移した。

年齢層別報告数では、幼児から成人まで報告されるが、学童期、青年期に多いとされる。5歳未満21.0%、5～9歳45.6%、10～14歳21.1%、15～19歳8.8%、20歳以上3.5%と、幅広い年齢層から報告されたものの、学童期を含む10歳未満からの報告数(約67%)が他の年齢層に比べ多かった。

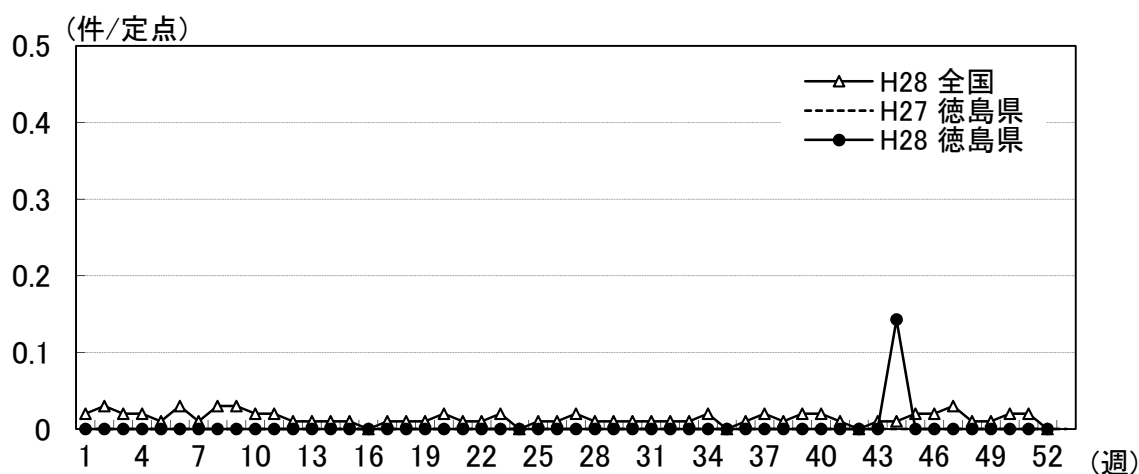
マイコプラズマ肺炎の週別患者報告状況



⑱ クラミジア肺炎

年間報告数は1件(70歳代)であった。過去5年間では、平成25年に3件報告されている。

クラミジア肺炎の週別患者報告状況



⑭ 感染性胃腸炎（ロタウイルス）

平成 25 年 10 月 14 日より基幹定点による届出対象疾患に追加された。

本年は 58 件報告され、前年（40 件）、前々年（32 件）と 2 年続けてやや増加した。冬（第 3 週）から春先にかけて多く報告されたが、夏季は報告されず、季節的な特徴が見られた。

年齢層別報告数は、5 歳未満 74.1%、5～9 歳 24.1%、10 歳以上 1.8%と、5 歳未満の乳幼児からの報告が大半を占めた。

感染性胃腸炎（ロタウイルス）の週別患者報告状況

